

抗精神病薬

劇薬、処方箋医薬品^注

アリピプラゾール錠/散

アリピプラゾール錠3mg「トーフ」
アリピプラゾール錠6mg「トーフ」
アリピプラゾール錠12mg「トーフ」
アリピプラゾール錠24mg「トーフ」
アリピプラゾール散1%「トーフ」

ARIPIPRAZOLE TABLETS 3mg “TOWA”/ TABLETS 6mg “TOWA”/
 TABLETS 12mg “TOWA”/ TABLETS 24mg “TOWA”/ POWDER 1%
 “TOWA”

貯 法：室温保存

有効期間：3年

注）注意－医師等の処方箋により使用すること

	錠3mg	錠6mg	錠12mg
承認番号	22900AMX00336	22900AMX00337	22900AMX00338
販売開始	2017年6月		
	錠24mg	散1%	
承認番号	22900AMX00339	22900AMX00475	
販売開始	2017年6月		

1. 警告

- 1.1 糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡等の死亡に至ることもある重大な副作用が発現するおそれがあるので、本剤投与中は高血糖の徴候・症状に注意すること。特に、糖尿病又はその既往歴もしくはその危険因子を有する患者には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合のみ投与することとし、投与にあたっては、血糖値の測定等の観察を十分に行うこと。[1. 2、8. 2、8. 4、9. 1. 3、11. 1. 6参照]
- 1.2 投与にあたっては、あらかじめ上記副作用が発現する場合があることを、患者及びその家族に十分に説明し、口渇、多飲、多尿、頻尿、多食、脱力感等の異常に注意し、このような症状があらわれた場合には、直ちに投与を中断し、医師の診察を受けるよう、指導すること。[1. 1、8. 2、8. 4、9. 1. 3、11. 1. 6参照]

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 昏睡状態の患者 [昏睡状態を悪化させるおそれがある。]
- 2.2 バルビツール酸誘導体・麻酔剤等の中枢神経抑制剤の強い影響下にある患者 [中枢神経抑制作用が増強されるおそれがある。]
- 2.3 アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療、又は歯科領域における浸潤麻酔もしくは伝達麻酔に使用する場合を除く） [10. 1参照]
- 2.4 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

*** 3.1 組成**

販売名	アリピプラゾール錠 3mg「トーフ」	アリピプラゾール錠 6mg「トーフ」
* 1錠中の有効成分	日局 アリピプラゾール3mg	日局 アリピプラゾール6mg
添加剤	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、青色2号アルミニウムレーキ、ステアリン酸マグネシウム	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム

販売名	アリピプラゾール錠 12mg「トーフ」	アリピプラゾール錠 24mg「トーフ」
* 1錠中の有効成分	日局 アリピプラゾール12mg	日局 アリピプラゾール24mg
添加剤	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、黄色三酸化鉄、ステアリン酸マグネシウム	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、結晶セルロース、三酸化鉄、ステアリン酸マグネシウム

販売名	アリピプラゾール散1%「トーフ」
1g中の有効成分	日局 アリピプラゾール10mg
添加剤	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、ヒドロキシプロピルセルロース、軽質無水ケイ酸

3.2 製剤の性状

販売名	アリピプラゾール錠 3mg「トーフ」	アリピプラゾール錠 6mg「トーフ」
性状・剤形	青色の割線入りの素錠	白色の割線入りの素錠
本体表示	表	アリピ 3
	裏	アリピプラゾール 3 トーフ
外形	表	
	裏	
	側面	
直径(mm)	6.0	7.0
厚さ(mm)	2.5	2.7
質量(mg)	95	135

販売名	アリピプラゾール錠 12mg「トーフ」	アリピプラゾール錠 24mg「トーフ」
性状・剤形	淡黄色の割線入りの素錠	淡赤色の割線入りの素錠
本体表示	表	アリピ 12
	裏	アリピプラゾール 12 トーフ
外形	表	
	裏	
	側面	
直径(mm)	8.0	9.0
厚さ(mm)	2.8	3.7
質量(mg)	180	300

販売名	アリピプラゾール散1%「トーフ」
性状・剤形	白色の散剤

** 4. 効能又は効果

〈錠3mg、錠6mg、錠12mg、散1%〉

○統合失調症

○双極性障害における躁症状の改善

○小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性

〈錠24mg〉

○統合失調症

○双極性障害における躁症状の改善

** 5. 効能又は効果に関連する注意

〈小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性〉

原則として6歳以上18歳未満の患者に使用すること。

** 6. 用法及び用量

〈統合失調症〉

通常、成人にはアリピプラゾールとして1日6～12mgを開始用量、1日6～24mgを維持用量とし、1回又は2回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、1日量は30mgを超えないこと。

〈双極性障害における躁症状の改善〉

通常、成人にはアリピプラゾールとして1日6～12mgを1日1回経口投与する。なお、開始用量は24mgとし、年齢、症状により適宜増減するが、1日量は30mgを超えないこと。

〈小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性〉

通常、アリピプラゾールとして1日1mgを開始用量、1日1～15mgを維持用量とし、1日1回経口投与する。なお、症状により適宜増減するが、増量幅は1日量として最大3mgとし、1日量は15mgを超えないこと。

7. 用法及び用量に関連する注意

〈効能共通〉

7.1 本剤が定常状態に達するまでに約2週間を要するため、2週間以内に増量しないことが望ましい。[16.1.2参照]

〈統合失調症〉

7.2 本剤の投与量は必要最小量となるよう、患者ごとに慎重に観察しながら調節すること。[増量による効果の増強は検証されていない。] [17.1.1-17.1.4参照]

7.3 他の抗精神病薬から本剤に変更する患者よりも、新たに統合失調症の治療を開始する患者で副作用が発現しやすいため、このような患者ではより慎重に症状を観察しながら用量を調節すること。

8. 重要な基本的注意

〈効能共通〉

8.1 眠気、注意力・集中力・反射運動能力等の低下が起こることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させないよう注意すること。

8.2 糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡等の死亡に至ることもある重大な副作用が発現するおそれがあるので、本剤投与中は、口渇、多飲、多尿、頻尿、多食、脱力感等の高血糖の徴候・症状に注意するとともに、糖尿病又はその既往歴もしくはその危険因子を有する患者については、血糖値の測定等の観察を十分に行うこと。[1.1、1.2、8.4、9.1.3、11.1.6参照]

8.3 低血糖があらわれることがあるので、本剤投与中は、脱力感、倦怠感、冷汗、振戦、傾眠、意識障害等の低血糖症状に注意するとともに、血糖値の測定等の観察を十分に行うこと。[8.4、11.1.7参照]

8.4 本剤の投与に際し、あらかじめ8.2及び8.3の副作用が発現する場合があることを、患者及びその家族に十分に説明し、高血糖症状（口渇、多飲、多尿、頻尿、多食、脱力感等）、低血糖症状（脱力感、倦怠感、冷汗、振戦、傾眠、意識障害等）に注意し、このような症状があらわれた場合には、直ちに投与を中断し、医師の診察を受けるよう、指導すること。[1.1、1.2、8.2、8.3、9.1.3、11.1.6、11.1.7参照]

8.5 原疾患による可能性もあるが、本剤投与後に病的賭博（個人的生活の崩壊等の社会的に不利な結果を招くにもかかわらず、持続的にギャンブルを繰り返す状態）、病的性欲亢進、強迫性購買、暴食等の衝動制御障害があらわれたとの報告がある。衝動制御障害の症状について、あらかじめ患者及び家族等に十分に説明を行い、症状があらわれた場合には、医師に相談するよう指導すること。また、患者の状態及び病態の変化を注意深く観察し、症状があらわれた場合には必要に応じて減量又は投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。

8.6 本剤の投与により体重の変動（増加、減少）を来すことがあるので、本剤投与中は体重の推移を注意深く観察し、体重の変動が認められた場合には原因精査（合併症の影響の有無等）を実施し、必要に応じて適切な処置を行うこと。

8.7 他の抗精神病薬を既に投与しているなど血清プロラクチン濃度が高い場合に本剤を投与すると、血清プロラクチン濃度が低下し月経が再開することがあるので、月経過多、貧血、子宮内膜症などの発現に十分注意すること。

8.8 嚥下障害が発現するおそれがあるので、特に誤嚥性肺炎のリスクのある患者に本剤を投与する場合には、慎重に経過を観察すること。

〈統合失調症、双極性障害における躁症状の改善〉

8.9 急性に不安、焦燥、興奮の症状を呈している患者に対し、本剤投与にて十分な効果が得られない場合には、鎮静剤の投与等、他の対処方法も考慮すること。

〈統合失調症〉

8.10 興奮、敵意、誇大性等の精神症状が悪化することがあるので、観察を十分に行い、悪化が見られた場合には他の治療方法に切り替えるなど適切な処置を行うこと。前治療薬からの切り替えの際には前治療薬の用量を徐々に減らしつつ、本剤の投与を行うことが望ましい。

〈双極性障害における躁症状の改善〉

8.11 躁症状が改善した場合には、本剤の投与継続の要否について検討し、本剤を漫然と投与しないよう注意すること。

〈小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性〉

** 8.12 定期的に安全性及び有効性を評価し、漫然と長期にわたり投与しないこと。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 心・血管疾患、低血圧又はこれらの疑いのある患者

一過性の血圧低下があらわれるおそれがある。

9.1.2 てんかん等の痙攣性疾患又はこれらの既往歴のある患者

痙攣閾値を低下させることがある。

9.1.3 糖尿病又はその既往歴を有する患者、もしくは糖尿病の家族歴、高血糖、肥満等の糖尿病の危険因子を有する患者

血糖値が上昇することがある。[1.1、1.2、8.2、8.4、11.1.6参照]

9.1.4 不動状態、長期臥床、肥満、脱水状態等の患者

肺塞栓症、静脈血栓症等の血栓塞栓症が報告されている。[11.1.10参照]

9.1.5 自殺企図の既往及び自殺念慮を有する患者

症状を悪化させるおそれがある。

9.3 肝機能障害患者

肝障害を悪化させるおそれがある。[11.1.11参照]

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。妊娠後期に抗精神病薬が投与されている場合、新生児に哺乳障害、傾眠、呼吸障害、振戦、筋緊張低下、易刺激性等の離脱症状や錐体外路症状があらわれたとの報告がある。なお、本剤の臨床試験において流産の報告がある。

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。ヒトで乳汁中への移行が認められている¹⁾。

9.7 小児等

〈統合失調症、双極性障害における躁症状の改善〉

9.7.1 小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

〈小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性〉

** 9.7.2 低出生体重児、新生児、乳児又は6歳未満の幼児を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない。

9.8 高齢者

患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。一般に生理機能が低下している。[16.6.3参照]

10. 相互作用

本剤は、主として肝代謝酵素CYP3A4及びCYP2D6で代謝される。[16.4参照]

10.1 併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アドレナリン （アナフィラキシーの救急治療、又は歯科領域における浸潤麻酔もしくは伝達麻酔に使用する場合を除く） ボスミン [2.3参照]	アドレナリンの作用を逆転させ、血圧低下を起こすおそれがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 α 、 β 受容体の刺激剤であり、本剤の α 受容体遮断作用により β 受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。

10.2 併用注意 (併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アドレナリン含有歯科麻酔剤 リドカイン・アドレナリン	血圧降下を起こすおそれがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性α、β受容体の刺激剤であり、本剤のα受容体遮断作用によりβ受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強されるおそれがある。
中枢神経抑制剤 バルビツール酸誘導体、麻酔剤等	中枢神経抑制作用があるので、減量するなど注意すること。	ともに中枢神経抑制作用を有する。
降圧剤	相互に降圧作用を増強することがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	ともに降圧作用を有する。
抗コリン作用を有する薬剤	抗コリン作用を増強させることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	ともに抗コリン作用を有する。
ドパミン作動薬 レドバ製剤	ドパミン作動作用を減弱するおそれがあるので、投与量を調節するなど慎重に投与すること。	本剤はドパミン受容体遮断作用を有する。
アルコール (飲酒)	相互に中枢神経抑制作用を増強させることがある。	ともに中枢神経抑制作用を有する。
CYP2D6阻害作用を有する薬剤 キニジン、パロキセチン等 [16.7.1、16.7.2参照]	本剤の作用が増強するおそれがあるので、本剤を減量するなど考慮すること。	本剤の主要代謝酵素であるCYP2D6を阻害するため本剤の血中濃度が上昇するおそれがある。
CYP3A4阻害作用を有する薬剤 イトラコナゾール、クラリスロマイシン等 [16.7.3参照]	本剤の作用が増強するおそれがあるので、本剤を減量するなど考慮すること。	本剤の主要代謝酵素であるCYP3A4を阻害するため本剤の血中濃度が上昇するおそれがある。
肝代謝酵素 (特にCYP3A4) 誘導作用を有する薬剤 カルバマゼピン、リファンピシン等 [16.7.5参照]	本剤の作用が減弱するおそれがある。	本剤の主要代謝酵素であるCYP3A4の誘導により本剤の血中濃度が低下するおそれがある。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 悪性症候群 (0.1%)

無動緘黙、強度の筋強剛、嚥下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それにひきつづき発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CKの上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能低下がみられることがある。なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎障害へと移行し、死亡することがある。

11.1.2 遅発性ジスキネジア (0.1%)

長期投与により、口周部等の不随意運動があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合は減量又は中止を考慮すること。なお、投与中止後も症状が持続することがある。

11.1.3 麻痺性イレウス (0.1%)

腸管麻痺 (食欲不振、悪心・嘔吐、著しい便秘、腹部の膨満あるいは弛緩及び腸内容物のうっ滞等の症状) をきたし、麻痺性イレウスに移行することがあるので、腸管麻痺があらわれた場合には、投与を中止すること。

11.1.4 アナフィラキシー (頻度不明)

11.1.5 横紋筋融解症 (0.1%)

CK上昇、血中及び尿中ミオグロビンの上昇等に注意すること。

11.1.6 糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性昏睡 (頻度不明)

本剤投与中は口渇、多飲、多尿、頻尿、多食、脱力感等の症状の発現に注意するとともに、血糖値の測定を行うなど十分な観察を行い、異常が認められた場合には、インスリン製剤の投与などの適切な処置を行うこと。死亡に至るなどの致命的な経過をたどった症例が報告されている。[1.1、1.2、8.2、8.4、9.1.3参照]

11.1.7 低血糖 (頻度不明)

脱力感、倦怠感、冷汗、振戦、傾眠、意識障害等の低血糖症状が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。[8.3、8.4参照]

11.1.8 痙攣 (0.4%)

11.1.9 無顆粒球症 (頻度不明)、白血球減少 (0.1%)

11.1.10 肺塞栓症、深部静脈血栓症 (頻度不明)

肺塞栓症、静脈血栓症等の血栓塞栓症が報告されているので、観察を十分に行い、息切れ、胸痛、四肢の疼痛、浮腫等が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。[9.1.4参照]

11.1.11 肝機能障害 (頻度不明)

AST、ALT、γ-GTP、ALPの上昇等を伴う肝機能障害があらわれることがある。[9.3参照]

11.2 その他の副作用

	5%以上	1~5%未満	1%未満	頻度不明
精神神経系	不眠、神経過敏、不安、傾眠	めまい、頭痛、うつ病、幻覚	リビドー亢進、リビドー減退、昏迷、自殺企図、攻撃的反応、異常思考、拒食、独語、知覚減退、注意力障害、もやもや感、末梢神経障害、持続勃起、射精障害、勃起不全、失神、感情不安定、錯乱、神経症、妄想、譫妄、躁病反応、精神症状、双極性障害、認知症、健忘、嗜眠、睡眠障害、鎮静、舌麻痺、気力低下、激越 (不安、焦燥、興奮)、パニック反応、片頭痛、顔面痙攣、錯覚	記憶障害、びくびく感、夢遊症、悪夢、衝動制御障害 (病的賭博、病的性欲亢進、強迫性購買、暴食等)、性機能不全、吃音、運動過多、精神的機能障害、感覚障害、眉間反射異常、広場恐怖症、無感情、気分動揺、異常行動、下肢静止不能症候群
錐体外路症状	アカシジア、振戦、流涎	寡動、歩行異常、ジストニア (筋緊張異常)、ジスキネジア、構音障害、筋強剛	嚥下障害、からだのこわばり、筋緊張、口のもつれ、眼瞼下垂、パーキンソン症候群、眼球挙上、眼球回転発作	錐体外路障害、反射亢進
循環器		頻脈、高血圧	心悸亢進、徐脈、低血圧、起立性低血圧、心電図異常 (期外収縮、QT延長、第一度房室ブロック等)	起立血圧異常、狭心症
消化器		便秘、悪心、嘔吐、腹痛、下痢、食欲不振、食欲亢進	胃炎、びらん性胃炎、胃腸炎、腸炎、十二指腸炎、消化不良、口内炎、口唇炎、口唇腫脹、腹部膨満、胃食道逆流性疾患、歯周病	膵炎、歯肉痛、舌障害、歯の知覚過敏
血液		赤血球減少、白血球減少、白血球増多、好中球減少、好中球増多、好酸球減少、単球増多、リンパ球減少、リンパ球増多、ヘモグロビン低下、ヘマトクリット値低下	貧血、赤血球増多、好塩基球減少、好塩基球増多、好酸球増多、単球減少、血小板減少、血小小板増多、ヘモグロビン上昇、ヘマトクリット値上昇	
内分泌		プロラクチン低下、月経異常	プロラクチン上昇	血中甲状腺刺激ホルモン増加、卵巣障害

	5%以上	1~5%未満	1%未満	頻度不明
肝臓	ALT上昇	AST上昇、LDH上昇、 γ -GTP上昇、Al-P上昇	脂肪肝、Al-P低下、LDH低下、総ビリルビン上昇、総ビリルビン低下	肝炎、黄疸
腎臓		BUN上昇、BUN低下、蛋白尿、尿沈渣異常	クレアチニン上昇、尿糖、尿ウロビリノーゲン上昇、尿ビリルビン上昇、尿中NAG上昇、尿比重上昇、尿比重低下、血中尿素減少、血中尿酸減少、尿量減少	ケトン尿
泌尿器		尿潜血	排尿障害、血尿、膀胱炎、尿閉、頻尿、多尿	尿失禁
過敏症			発疹、光線過敏性反応、湿疹、紅斑、そう痒症、酒さ	血管浮腫、蕁麻疹、薬物過敏症
皮膚			ざ瘡、皮膚炎、皮膚乾燥、皮膚剥脱、乾皮症、色素沈着障害、脂漏、男性型多毛症	真菌感染、脱毛
代謝異常	CK上昇	口渇、コレステロール低下、HDL-コレステロール上昇、トリグリセライド上昇、リン脂質低下	多飲症、高血糖、水中毒、高尿酸血症、高脂血症、脂質代謝障害、コレステロール上昇、HDL-コレステロール低下、トリグリセライド低下、CK低下	血中ブドウ糖変動、血中インスリン増加
呼吸器			鼻炎、咽頭炎、気管支炎、気管支痙攣、咽喉頭症状、しゃっくり、鼻乾燥	嚥下性肺炎、上気道感染、呼吸困難
眼			霧視、眼乾燥、視力障害、調節障害、羞明、眼の異常感、眼痛	眼のチカチカ、糖尿病性白内障、瞬目過多
その他	体重増加	体重減少、倦怠感、脱力感、発熱、多汗、総蛋白減少、グロブリン分画異常、ナトリウム低下、カリウム低下、クロール低下	疲労、ほてり、熱感、灼熱感、背部痛、四肢痛、関節痛、筋痛、頸部痛、肩こり、筋痙攣、悪寒、末梢冷感、性器出血、流産、胸痛、膿瘍、歯ぎしり、睡眠時驚愕、鼻出血、末梢性浮腫、挫傷、気分不良、味覚異常、耳鳴、寝汗、四肢不快感、薬剤離脱症候群、顔面浮腫、握力低下、転倒、総蛋白上昇、A/G上昇、A/G低下、アルブミン上昇、アルブミン低下、ナトリウム上昇、カリウム上昇、クロール上昇	低体温、疼痛、顎痛、乳頭痛、乳腺炎、外陰腔乾燥、無オルガズム症、死亡、関節脱臼、歯牙破折、筋痙攣、尿路感染、花粉症、関節炎、関節硬直、筋萎縮、脂肪腫、坐骨神経痛、大脳動脈狭窄

13. 過量投与

13.1 症状

外国の臨床試験及び市販後自発報告において、最高1,260mgまで偶発的又は企図的に急性過量投与された成人において嗜眠、傾眠、血圧上昇、頻脈、嘔吐等の症状が報告されている。また最高195mgまで偶発的に服用した小児において、一過性の意識消失、傾眠等の症状が発現した。

13.2 処置

活性炭の早期投与は有用である。血液透析は有用でないと考えられる。なお、他剤服用の可能性が考えられる場合はその影響にも留意すること。[16.7.6参照]

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

(製剤共通)

14.1.1 小児の手の届かない所に保管すること。

(錠)

14.1.2 PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

15. その他の注意

15.1 臨床使用に基づく情報

15.1.1 本剤による治療中原因不明の突然死が報告されている。

15.1.2 外国で実施された高齢認知症患者を対象とした17の臨床試験において、本剤を含む非定型抗精神病薬投与群はプラセボ投与群と比較して、死亡率が1.6~1.7倍高かったとの報告がある。死因は様々であったが、心血管系(心不全、突然死等)又は感染症(肺炎等)による死亡が多かった。なお、本剤の3試験(計938例、平均年齢82.4歳;56~99歳)では、死亡及び脳血管障害(脳卒中、一過性脳虚血発作等)の発現率がプラセボと比較して高かった。また、外国での疫学調査において、定型抗精神病薬も非定型抗精神病薬と同様に死亡率の上昇に関与するとの報告がある。

15.2 非臨床試験に基づく情報

15.2.1 げっ歯類(マウス、ラット)のがん原性試験において、乳腺腫瘍(雌マウス3mg/kg/日以上、雌ラット10mg/kg/日)及び下垂体腫瘍(雌マウス3mg/kg/日以上)の発生頻度の上昇が報告されている。これらの腫瘍はげっ歯類では血中プロラクチンの上昇と関連した変化としてよく知られている。ラットのがん原性試験において、60mg/kg/日(最高臨床推奨用量の100倍に相当)の雌の投与群で副腎皮質腫瘍の発生頻度の上昇が報告されている。

15.2.2 サルの反復経口投与試験において胆のう内の沈渣(泥状、胆砂、胆石)が4週間~52週間試験の25mg/kg/日以上用量で、肝臓に限局性の肝結石症様病理組織所見が39週間試験の50mg/kg/日以上用量で報告されている。沈渣はアリピプラゾール由来の複数の代謝物がサル胆汁中で溶解度を超える濃度となり沈殿したものと考えられた。なお、これら代謝物のヒト胆汁中における濃度(1日目15mg/日投与、その後6日間30mg/日反復経口投与时)はサル胆汁中における濃度の5.6%以下であり、また、ヒト胆汁中における溶解度の5.4%以下であった。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単回投与

健康成人20例にアリピプラゾール6mgを空腹時単回経口投与した時、最終相半減期は約61時間であった。²⁾

アリピプラゾール6mg単回投与時の薬物動態パラメータ

投与量	t _{max} (hr)	C _{max} (ng/mL)	t _{1/2} (hr)	AUC _{168hr} (ng・hr/mL)
6mg錠×1錠	3.6±2.5	30.96±5.39	61.03±19.59	1,692.9±431.7

(平均値±標準偏差、20例)

16.1.2 反復投与

健康成人15例にアリピプラゾール3mgを食後1日1回14日間反復投与した時、アリピプラゾールの血漿中濃度は投与14日までに定常状態に到達し、反復投与後の消失半減期は約65時間であった。^{3),4)} [7.1参照]

アリピプラゾール3mg反復投与時の薬物動態パラメータ

	化合物	t _{max} (hr)	C _{max} (ng/mL)	t _{1/2} (hr)	AUC _{24hr} (ng・hr/mL)
投与 1日目	未変化体	3.7±1.3	12.00±7.96	-	159.0±95.1
	主代謝物 (OPC-14857 ^{a)})	18.4±8.6 ^{b)}	0.63±0.63	-	8.2±8.2
投与 14日目	未変化体	4.2±3.4	44.26±29.28	64.59±15.39	678.0±413.0 ^{c)}
	主代謝物 (OPC-14857 ^{a)})	6.2±6.7	10.88±6.42	110.23±64.94	185.7±93.4 ^{c)}

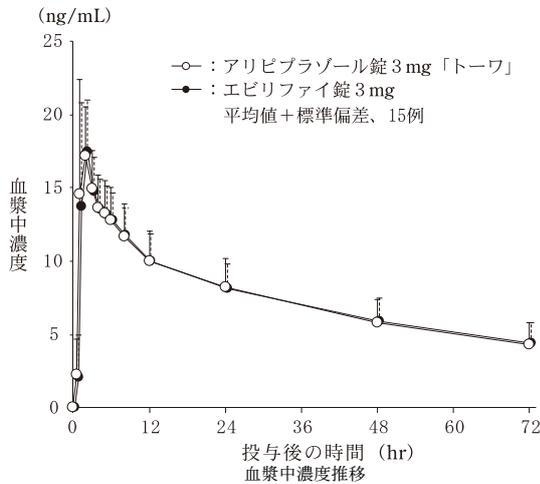
(-:算出せず、平均値±標準偏差、15例)

a) 活性代謝物、b) 9例、c) 投与間隔間のAUC

16.1.3 生物学的同等性試験

〈アリピラゾール錠3mg「トール」〉

アリピラゾール錠3mg「トール」とエビリファイ錠3mgを、クロスオーバー法によりそれぞれ1錠（アリピラゾールとして3mg）健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、C_{max}）について90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、log(0.80)～log(1.25)の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された。⁵⁾



薬物動態パラメータ

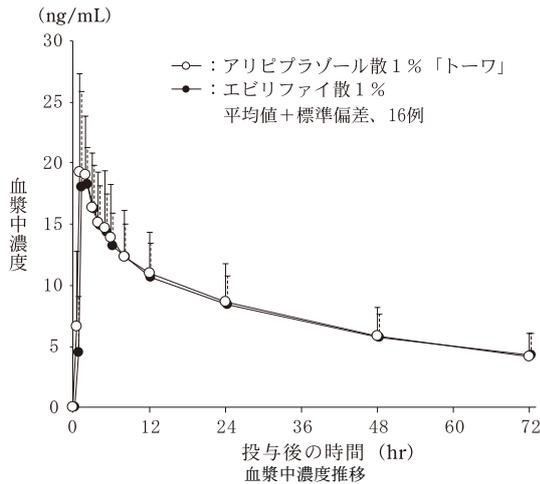
	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC _{72hr} (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
アリピラゾール錠3mg「トール」	544.6±124.1	18.77±4.18	2.13±1.30	53.9±18.3
エビリファイ錠3mg	545.1±108.0	18.70±3.78	2.13±1.25	56.8±18.6

(平均値±標準偏差、15例)

血漿中濃度並びにAUC、C_{max}等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

〈アリピラゾール散1%「トール」〉

アリピラゾール散1%「トール」とエビリファイ散1%を、クロスオーバー法によりそれぞれ0.3g（アリピラゾールとして3mg）健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、C_{max}）について90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、log(0.80)～log(1.25)の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された。⁵⁾



薬物動態パラメータ

	製剤投与量 (アリピラゾールとして)	判定パラメータ		参考パラメータ	
		AUC _{72hr} (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
アリピラゾール散1%「トール」	0.3g (3mg)	575.2±195.9	21.89±5.94	2.00±1.32	45.59±11.91
エビリファイ散1%	0.3g (3mg)	562.4±151.2	21.17±4.64	1.50±0.63	47.93±12.85

(平均値±標準偏差、16例)

血漿中濃度並びにAUC、C_{max}等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響

健康成人にアリピラゾール3mgを空腹時又は食後に単回経口投与した時、アリピラゾールのC_{max}及びAUCに及ぼす食事の影響は認められなかった。⁶⁾

16.2.2 絶対的バイオアベイラビリティ

健康成人におけるアリピラゾール経口投与時の絶対的バイオアベイラビリティは87%であった（外国人データ）。⁷⁾

16.3 分布

16.3.1 分布容積

健康成人における1日1回アリピラゾール3mg反復経口投与時の分布容積は8.86L/kgであった。外国の健康成人におけるアリピラゾール2mg静脈内投与時の分布容積は4.94L/kgであった。^{3),8)}

16.3.2 血清蛋白結合率

未変化体の血清蛋白結合率は99%以上で、主としてアルブミンと結合し、蛋白結合においてワルファリンとの結合置換は生じない。また、主代謝物であるOPC-14857の血清蛋白結合率も99%以上である（*in vitro*、平衡透析法）。⁹⁾

16.4 代謝

アリピラゾールは主に肝臓で代謝され、初回通過効果は少ない。主としてCYP3A4とCYP2D6によって脱水素化と水酸化を受け、またCYP3A4によってN-脱アルキル化を受ける。脱水素体(OPC-14857)が血漿中における主代謝物である。OPC-14857はアリピラゾール（未変化体）と同様の代謝酵素及び代謝経路によって代謝される。定常状態（投与14日目）では未変化体に対するOPC-14857のAUCの割合は約27%である。^{3),4)} [10. 参照]

16.5 排泄

健康成人に¹⁴C標識アリピラゾール20mgを経口投与した時、投与放射能の約27%及び60%がそれぞれ尿中及び糞便中に排泄された。未変化体は糞中に約18%排泄され、尿中には検出されなかった（外国人データ）。¹⁰⁾

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

重度の腎機能障害被験者6例（クレアチニンクリアランス<30mL/min）における試験では、腎機能障害による血中薬物動態への影響は少なかった（外国人データ）。¹¹⁾

16.6.2 肝機能障害患者

肝機能障害被験者19例（Child-Pugh分類A～C）における試験では、肝機能障害によるクリアランスへの影響は少なかった（外国人データ）。¹²⁾

16.6.3 高齢者

健康高齢者（65歳以上）にアリピラゾール15mgを単回経口投与した時のクリアランスは、非高齢者（18～64歳）よりも約20%低かった（外国人データ）。¹³⁾ [9. 8参照]

16.6.4 性別・喫煙

健康成人にアリピラゾール15mgを単回経口投与した時のアリピラゾールの薬物動態に性差はみられなかった。また、統合失調症患者での母集団解析の結果、喫煙はアリピラゾールの薬物動態に影響を与える因子ではなかった（外国人データ）。^{13),14)}

16.7 薬物相互作用

16.7.1 キニジン

健康成人において、CYP2D6の阻害作用を有するキニジン166mgとアリピラゾール10mgの併用により、アリピラゾールのAUCは107%増加した（外国人データ）。¹⁵⁾ [10. 2参照]

16.7.2 パロキセチン

健康成人において、CYP2D6の阻害作用を有するパロキセチン20mgとアリピラゾール3mgの併用により、アリピラゾールのC_{max}及びAUCはそれぞれ39%及び140%増加した。¹⁶⁾ [10. 2参照]

16.7.3 イトラコナゾール

健康成人において、CYP3A4の阻害作用を有するイトラコナゾール100mgとアリピラゾール3mgの併用により、アリピラゾールのC_{max}及びAUCはそれぞれ19%及び48%増加した。¹⁷⁾ [10. 2参照]

16.7.4 ケトコナゾール

健康成人において、CYP3A4の阻害作用を有するケトコナゾール200mgとアリピラゾール15mgの併用により、アリピラゾールのC_{max}及びAUCはそれぞれ37%及び63%増加した（外国人データ）。¹⁸⁾

16.7.5 カルバマゼピン

統合失調症又は統合失調感情障害患者において、CYP3A4の誘導作用を有するカルバマゼピン400mgとアリピラゾール30mgの併用投与により、アリピラゾールのC_{max}及びAUCはそれぞれ68%及び73%低下した（外国人データ）。¹⁹⁾ [10. 2参照]

16.7.6 活性炭

健康成人において、アリピラゾール15mg投与1時間後の活性炭50g投与で、アリピラゾールのC_{max}及びAUCはそれぞれ41%及び51%低下した（外国人データ）。²⁰⁾ [13. 2参照]

16.8 その他

〈アリピプラゾール錠6mg「トーワ」、アリピプラゾール錠12mg「トーワ」、アリピプラゾール錠24mg「トーワ」〉
アリピプラゾール錠6mg「トーワ」、アリピプラゾール錠12mg「トーワ」及びアリピプラゾール錠24mg「トーワ」は、含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性ガイドラインに基づき、アリピプラゾール錠3mg「トーワ」を標準製剤としたとき、溶出挙動が同等と判断され、生物学的に同等とみなされた。^{21), 22), 23)}

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

アリピプラゾール錠の成績を以下に示す。

〈統合失調症〉

17.1.1 国内後期第Ⅱ相試験

アリピプラゾール4~30mg^{注1)}を8週間経口投与した非盲検試験において、統合失調症患者129例における主な成績は次のとおりである。主要評価項目である最終全般改善度の改善率^{注2)}は、48.8% (63/129例)であった。²⁴⁾ [7.2参照]

17.1.2 国内第Ⅲ相試験

(1) 統合失調症患者242例を対象に実施した実薬対照二重盲検比較試験において、アリピプラゾール6mg/日を開始用量とし、24mg/日を最高用量として1日1回又は2回8週間経口投与した。主要評価項目である最終全般改善度における改善率^{注2)}は以下に示すとおりで、統合失調症に対する有効性が認められた。

対象症例	改善率 ^{注2)}
アリピプラゾール投与群	45.8% (55/120例)

副作用発現頻度は、120例中93例 (77.5%)であった。主な副作用は、不眠 (症) 36例 (30.0%)、アカシジア26例 (21.7%)、振戦25例 (20.8%)、食欲不振14例 (11.7%) 及び筋強剛13例 (10.8%)であった。²⁴⁾

(2) 統合失調症患者243例を対象に実施した実薬対照二重盲検比較試験において、アリピプラゾール6mg/日を開始用量とし、24mg/日を最高用量として1日2回8週間経口投与した。主要評価項目である最終全般改善度における改善率^{注2)}は以下に示すとおりで、統合失調症に対する有効性が認められた。

対象症例	改善率 ^{注2)}
アリピプラゾール投与群	31.7% (38/120例)

副作用発現頻度は、120例中87例 (72.5%)であった。主な副作用は、不眠 (症) 42例 (35.0%)、アカシジア17例 (14.2%)、振戦17例 (14.2%)、体重減少16例 (13.3%) 及び食欲不振14例 (11.7%)であった。²⁴⁾

すべての国内臨床試験は任意増減法で実施されているため、増量することで効果の増強が認められるか否かは検証されていない。²⁵⁾ [7.2参照]

17.1.3 国内長期投与試験

最終全般改善度を有効性評価項目とした24週間以上投与の長期投与3試験 (6~24mg/日、最高30mg/日) での、統合失調症患者204例 (25週以降も投与継続した症例) における最終評価時の改善率^{注2)}は41.2% (84/204例)であった。²⁴⁾ [7.2参照]

17.1.4 海外第Ⅲ相試験

(1) 急性期試験

統合失調症の急性増悪期の患者を対象とした、4あるいは6週間投与のプラセボ対照二重盲検比較試験 (310例、305例、420例) において、アリピプラゾールはプラセボ群と比較してPANSS全尺度合計点などの指標を有意に改善した。PANSS全尺度合計点 (平均変化量) は、アリピプラゾール固定用量 (15、30mg/日又は20、30mg/日)^{注1)}を4週間投与した2試験では、プラセボ群: -2.9 (102例)、15mg/日群: -15.5 (99例)、30mg/日群: -11.4 (100例) 又はプラセボ群: -5.0 (103例)、20mg/日群: -14.5 (98例)、30mg/日群: -13.9 (96例) であり、アリピプラゾール固定用量 (10、15、20mg/日)^{注1)}を用いた6週間投与の試験では、プラセボ群: -2.3 (107例)、10mg/日群: -15.0 (103例)、15mg/日群: -11.7 (103例)、20mg/日群: -14.4 (97例) であった (各群とプラセボ群との比較結果は $p \leq 0.01$)。²⁴⁾ なお、15mgを超える高用量群が10又は15mgより効果が高いというエビデンスは得られていない。²⁵⁾ [7.2参照]

(2) 再発予防試験

安定期にある慢性統合失調症患者310例を対象としたプラセボ対照二重盲検比較試験 (26週間投与、15mg/日^{注1)}) において、CGI改善度あるいはPANSSを用いて再発を定義し、主要有効性評価項目を「無作為化割付から再発までの期間」とした。アリピプラゾールはプラセボと比較して再発の危険を約50%減少させ、再発までの期間を有意に延長した ($p < 0.001$, log-rank検定)。副作用発現頻度は、153例中76例 (50%) であった。主な副作用は、不眠症36例 (24%)、アカシジア11例 (7%)、不安11例 (7%)、頭痛9例 (6%) 及び振戦8例 (5%) であった。²⁴⁾ [7.2参照]

注1) 改善率は中等度改善以上の改善率を示す。最終全般改善度は、「著明改善」、「中等度改善」、「軽度改善」、「不変」、「軽度悪化」、「中等度悪化」、「著明悪化」、「判定不能」で評価した。

注2) 本剤の承認された用法及び用量は、「1日6~12mgを開始用量、1日6~24mgを維持用量とし、1回又は2回に分けて経口投与する。」である。

〈双極性障害における躁症状の改善〉

17.1.5 第Ⅲ相国際共同試験 (短期試験)

躁病エピソード又は混合性エピソードを呈した双極Ⅰ型障害患者 (256例、日本人患者79例を含む) を対象に実施したプラセボ対照無作為化二重盲検並行群間比較試験において、アリピプラゾール24mg (忍容性に依りて12mgへの減量可能) を1日1回3週間投与した時、最終評価時におけるヤング躁病評価尺度 (Young-Mania Rating Scale, YMRS) 合計点のベースラインからの変化量 (平均値±標準偏差) はアリピプラゾール群-12.0±12.9、プラセボ群-6.0±14.4で、群間差とその95%信頼区間は-6.0 [-9.4, -2.7] であり、統計学的な有意差が認められた ($p < 0.001$ 、ベースライン値及び国で調整した共分散分析)。

最終評価時におけるYMRS合計点のベースラインからの変化量 (FAS, LOCF)

投与群	例数	YMRS合計点			プラセボ群との対比較 ^{a)}	
		ベースライン	最終評価時	ベースラインからの変化量	群間差 [95%信頼区間]	p値
プラセボ群	125	28.0±5.97	22.0±15.23	-6.0±14.4	-6.0 [-9.4, -2.7]	<0.001
アリピプラゾール群	122	28.3±5.96	16.3±13.37	-12.0±12.9		

(平均値±標準偏差、a) ベースライン値及び国で調整した共分散分析)

副作用発現頻度は、123例中74例 (60.2%) であった。主な副作用は、アカシジア23例 (18.7%)、振戦14例 (11.4%)、不眠症11例 (8.9%)、嘔吐11例 (8.9%) 及び流涎過多9例 (7.3%) であった。^{26), 27)}

17.1.6 長期投与試験

(1) 国際共同試験

短期試験を完了した有効例 (99例、日本人患者32例を含む) を対象に実施したプラセボ対照二重盲検並行群間比較試験において、アリピプラゾール12~30mgを1日1回22週間投与した時、YMRS合計点の推移は下表のとおりであった。

YMRS合計点の推移 (FAS, LOCF)

投与群	例数	ベースライン	4週	12週	22週
プラセボ群	42	8.6±7.58	11.9±12.13	12.4±13.98	12.1±14.33
アリピプラゾール群	54	7.4±7.02	6.6±9.37	6.9±11.36	6.3±11.54

(平均値±標準偏差)

副作用発現頻度は、54例中39例 (72.2%) であった。主な副作用は、アカシジア17例 (31.5%)、振戦8例 (14.8%)、運動緩慢5例 (9.3%)、不眠症5例 (9.3%) 及び流涎過多5例 (9.3%) であった。²⁸⁾

(2) 国際共同試験 (気分安定薬併用)

短期試験を完了した悪化例・不変例及び効果不十分中止例 (59例、日本人患者11例を含む) を対象に実施した非盲検試験において、気分安定薬として炭酸リチウム又はバルプロ酸ナトリウムのいずれか1剤の併用下で、アリピプラゾール12~30mgを1日1回22週間投与した時、YMRS合計点の推移は下表のとおりであった。

YMRS合計点の推移 (FAS, LOCF)

例数	ベースライン	4週	12週	22週
55	30.5±7.75	13.1±11.63	10.4±11.69	9.7±11.84

(平均値±標準偏差)

副作用発現頻度は、56例中39例 (69.6%) であった。主な副作用は、体重増加11例 (19.6%)、アカシジア10例 (17.9%)、傾眠7例 (12.5%) 及び振戦7例 (12.5%) であった。²⁹⁾

(3) 国内臨床試験 (気分安定薬併用)

躁病エピソード又は混合性エピソードを呈した双極Ⅰ型障害患者41例を対象に実施した非盲検試験において、気分安定薬として炭酸リチウム又はバルプロ酸ナトリウムのいずれか1剤の併用下で、アリピプラゾール12~30mgを1日1回24週間投与した時、YMRS合計点の推移は下表のとおりであった。

YMRS合計点の推移 (FAS, LOCF)

例数	ベースライン	4週	12週	24週
40	23.2±5.50	8.8±8.46	5.1±7.19	4.4±7.23

(平均値±標準偏差)

副作用発現頻度は、41例中38例 (92.7%) であった。主な副作用は、アカシジア19例 (46.3%)、傾眠11例 (26.8%)、振戦9例 (22.0%) 及び悪心8例 (19.5%) であった。³⁰⁾

〈小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性〉

** 17.1.7 国内第Ⅲ相試験

DSM^{注2)}-IV-TRにより自閉性障害と診断され、易刺激性を有する患者92例 (6~17歳) を対象に実施したプラセボ対照無作為化二重盲検並行群間比較試験で、アリピプラゾールを1~15mg/日で1日1回8週間投与した時、最終評価時におけるABC-J (異常行動チェックリスト日本語版) の興奮性下位尺度スコアのベースラインからの変化量は、プラセボ群に対しアリピプラゾール群で統計学的な有意差が認められた ($p = 0.044$ 、投与群及びベースラインの体重区分 ($\geq 40\text{kg}$, $<40\text{kg}$) を因子とし、ベースラインを共変量とした共分散分析)。^{31), 32)}

注2) American Psychiatric Association (米国精神医学会) のDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (精神疾患の診断・統計マニュアル)

最終評価時におけるABC-J興奮性下位尺度スコアのベースラインからの変化量 (FAS、LOCF)

投与群	例数	ABC-J 興奮性下位尺度スコア			プラセボ群との対比較 ^{a)}	
		ベースライン	最終 評価時	ベースライン からの変化量	群間差 [95%信頼区間]	p値
プラセボ群	45	26.8±6.5	20.2±9.1	-6.7±11.0	-3.9 [-7.8, -0.1]	0.044
アリピプラゾール群	47	27.1±7.2	15.8±10.1	-11.3±9.1		

(平均値±標準偏差、a) 投与群及びベースラインの体重区分 (≥40kg、<40kg) を因子とし、ベースラインを共変量とした共分散分析)

副作用発現頻度は、47例中28例 (59.6%) であった。主な副作用は、傾眠24例 (51.1%)、食欲減退5例 (10.6%) 及び倦怠感3例 (6.4%) であった。

** 17.1.8 国内長期投与試験

国内第Ⅲ相試験を完了した患者85例 (6~17歳) を対象に実施した非盲検非対照長期試験で、アリピプラゾールを1~15mg/日で1日1回投与した時、ABC-J興奮性下位尺度スコアの推移は下表のとおりであった。³³⁾

ABC-J興奮性下位尺度スコアの推移 (有効性解析対象集団、OC)

ベースライン	8週	24週	48週	96週
17.7±10.0 (85)	13.5±9.9 (83)	13.3±9.9 (62)	11.6±8.8 (46)	14.9±10.3 (26)

(平均値±標準偏差 (評価例数))

副作用発現頻度は、85例中47例 (55.3%) であった。主な副作用は、傾眠25例 (29.4%)、体重増加16例 (18.8%)、流涎過多6例 (7.1%) 及び食欲亢進6例 (7.1%) であった。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

アリピプラゾールは、ドパミンD₂受容体部分アゴニスト作用、ドパミンD₃受容体部分アゴニスト作用、セロトニン5-HT_{1A}受容体部分アゴニスト作用及びセロトニン5-HT_{2A}受容体アンタゴニスト作用を併せ持つ薬剤である。明確な機序は不明であるが、これらの薬理作用が臨床における有用性に寄与しているものと考えられている。³⁴⁾

18.2 受容体親和性

受容体結合試験で、組換え型ヒトドパミンD₂、ヒトドパミンD₃、ヒトセロトニン5-HT_{1A}及びヒトセロトニン5-HT_{2A}受容体に対して高い親和性を示し、ヒトドパミンD₄、ヒトセロトニン5-HT_{2C}、ヒトセロトニン5-HT₇、ラット大脳皮質α₁-アドレナリン及びヒトヒスタミンH₁受容体にて中程度の親和性を示した。ウシ線条体ムスカリンM₁、ラット心臓ムスカリンM₂及びモルモット回腸ムスカリンM₃受容体に対する親和性は低かった (*in vitro*)。^{35), 36), 37)}

18.3 ドパミンD₂受容体部分アゴニスト作用

ドパミンD₂受容体に対して部分アゴニストとして作用した (*in vitro*)。マウス及びラットにおいて、ドパミン作動性神経伝達が亢進した状態ではドパミンD₂受容体に対してアンタゴニストとして作用し、ドパミン作動性神経伝達が低下した状態ではドパミンD₂受容体に対してアゴニストとして作用した。^{35), 38), 39)}

18.4 ドパミンD₃受容体部分アゴニスト作用

ドパミンD₃受容体に対して部分アゴニストとして作用した (*in vitro*)。⁴⁰⁾

18.5 セロトニン5-HT_{1A}受容体部分アゴニスト作用

セロトニン5-HT_{1A}受容体に対して部分アゴニストとして作用した (*in vitro*)。マウス脳内のセロトニン代謝物5-ヒドロキシインドール酢酸含量を減少させ、ラット縫線核のセロトニンニューロン発火を抑制した。^{36), 41)}

18.6 セロトニン5-HT_{2A}受容体アンタゴニスト作用

マウスにおいてセロトニン5-HT_{2A}受容体アゴニストにより誘発される行動変化を抑制した。また、セロトニンによるラットP11細胞内Ca²⁺濃度の増加を抑制した (*in vitro*)。^{42), 43)}

18.7 統合失調症諸症状に関連する動物モデルでの改善作用

陽性症状の指標と考えられているラット条件回避反応を抑制し、不安症状の指標であると考えられているラットコンフリクト反応を抑制した。⁴⁴⁾

18.8 カタレプシー惹起作用

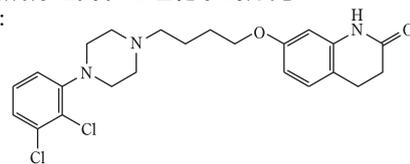
マウス及びラットにおけるアポモルヒネ誘発常同行動抑制作用に対するカタレプシー惹起作用のED₅₀値の用量比は、クロルプロマジン及びハロペリドールより大きかった。³⁹⁾

18.9 血中プロラクチン濃度を調節する下垂体前葉ドパミンD₂受容体に対する作用

ラット下垂体前葉ドパミンD₂受容体に対して部分アゴニストとして作用した (*in vitro*)。³⁸⁾

19. 有効成分に関する理化学的知見

構造式：



一般名：アリピプラゾール (Aripiprazole)

化学名：7-[4-[4-(2,3-Dichlorophenyl)piperazin-1-yl]butoxy]-3,4-dihydroquinolin-2(1H)-one

分子式：C₂₃H₂₇Cl₂N₃O₂

分子量：448.39

性状：白色の結晶又は結晶性の粉末である。ジクロロメタンに溶けやすく、水、アセトニトリル、メタノール又はエタノール (99.5) にほとんど溶けない。結晶多形が認められる。

22. 包装

〈アリピプラゾール錠3mg「トーワ」〉

100錠 [10錠×10：PTP]

300錠 [バラ、乾燥剤入り]

〈アリピプラゾール錠6mg「トーワ」〉

100錠 [10錠×10：PTP]

300錠 [バラ、乾燥剤入り]

〈アリピプラゾール錠12mg「トーワ」〉

100錠 [10錠×10：PTP]

300錠 [バラ、乾燥剤入り]

〈アリピプラゾール錠24mg「トーワ」〉

100錠 [10錠×10：PTP]

300錠 [バラ、乾燥剤入り]

〈アリピプラゾール散1%「トーワ」〉

100g [バラ、乾燥剤入り]

** 23. 主要文献

- Schlotterbeck, P. et al. : Int J Neuropsychopharmacol. 2007 ; 10 (3) : 433.
- 単回経口投与試験 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.1.2、2.7.6.1)
- 反復経口投与試験 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 代謝 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.2.3)
- 白源 正成ほか：診療と新薬. 2017 ; 54(3) : 219-238.
- 食事による影響の検討 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.1)
- 絶対的バイオアベイラビリティ (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.1)
- 静脈内投与時の血漿中動態 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.2.3)
- 蛋白結合率 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.2.3)
- 排泄 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 腎障害患者における薬物動態 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 肝障害患者における薬物動態 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 年齢、性別による影響 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 母集団薬物動態及び薬力学解析 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- キニジンとの相互作用 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- Azuma, J. et al. : Eur J Clin Pharmacol. 2012 ; 68(1) : 29-37.
- Kubo, M. et al. : Drug Metab Pharmacokinet. 2005 ; 20(1) : 55-64.
- ケトコナゾールとの相互作用 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- カルバマゼピンとの相互作用 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 活性炭併用投与時の薬物動態 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.3)
- 社内資料：生物学的同毒性試験 (錠6mg)
- 社内資料：生物学的同毒性試験 (錠12mg)
- 社内資料：生物学的同毒性試験 (錠24mg)
- 統合失調症を対象とした臨床試験 (エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.7.6.5)

- 25) 用法・用量（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、審査報告書）
- 26) 双極性障害における躁症状に対する短期試験（二重盲検試験：国際共同試験）（エビリファイ錠/散/内用液/OD錠：2012年1月18日承認、申請資料概要2.7.6.3）
- 27) 双極性障害における躁症状に対する短期試験（二重盲検試験：国際共同試験）（エビリファイ錠/散/内用液/OD錠：2012年1月18日承認、審査報告書）
- 28) 双極性障害における躁症状に対する長期投与試験（二重盲検試験：国際共同試験）（エビリファイ錠/散/内用液/OD錠：2012年1月18日承認、申請資料概要2.7.6.3、2.7.6.5）
- 29) 双極性障害における躁症状に対する長期投与試験（気分安定薬併用非盲検試験：国際共同試験）（エビリファイ錠/散/内用液/OD錠：2012年1月18日承認、申請資料概要2.7.6.4、2.7.6.5）
- 30) 双極性障害における躁症状に対する長期投与試験（気分安定薬併用非盲検試験：国内臨床試験）（エビリファイ錠/散/内用液/OD錠：2012年1月18日承認、申請資料概要2.7.6.4、2.7.6.5）
- 31) 小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性に対する短期試験（エビリファイ錠/OD錠/散/内用液：2016年9月28日承認、申請資料概要2.7.6.2）
- 32) 小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性に対する短期試験（エビリファイ錠/OD錠/散/内用液：2016年9月28日承認、審査報告書）
- 33) 小児期の自閉スペクトラム症に伴う易刺激性に対する長期試験（エビリファイ錠/OD錠/散/内用液：2016年9月28日承認、申請資料概要2.7.6.2）
- 34) アリピプラゾールの薬理作用（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.6.1.2）
- 35) Burris, K. D. et al. : J Pharmacol Exp Ther. 2002 ; 302(1) : 381-389.
- 36) Jordan, S. et al. : Eur J Pharmacol. 2002 ; 441(3) : 137-140.
- 37) 各種受容体に対する親和性（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.6.2.2）
- 38) Inoue, T. et al. : J Pharmacol Exp Ther. 1996 ; 277(1) : 137-143.
- 39) Kikuchi, T. et al. : J Pharmacol Exp Ther. 1995 ; 274(1) : 329-336.
- 40) Tadori, Y. et al. : Eur J Pharmacol. 2008 ; 597(1-3) : 27-33.
- 41) ラットにおけるセロトニン神経活動に対する作用（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.6.2.2）
- 42) Hirose, T. et al. : J Psychopharmacol. 2004 ; 18(3) : 375-383.
- 43) ラットセロトニン5-HT_{2A}受容体に対する薬理的検討（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.6.2.2）
- 44) 統合失調症及び不安の動物モデル（エビリファイ錠/散：2006年1月23日承認、申請資料概要2.6.2.2）

24. 文献請求先及び問い合わせ先

東和薬品株式会社 学術部DIセンター
 〒570-0081 大阪府守口市日吉町2丁目5番15号
 TEL 0120-108-932 FAX 06-7177-7379

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

東和薬品株式会社

大阪府門真市新橋町2番11号